

令和6年度 第13回美里地域会議 会議録

日 時：令和7年3月25日（火）19時～20時30分

場 所：美里交流館 多目的ホール

出席者：出席者：太田市長

＜地域会議委員＞ 青木 徹、大坪 道助、岡本 渉、北村 猛志、小林 健一、
小林 忠雄、清水 幸男、鈴木 智映子、豊田 博久、
中島 康隆、野村 耕一、松村 洋、濱野 敏子、丸石 敏憲、
望月 英光、森口 美代子、山本 由和、吉本 勝

＜地域振興部＞ 能見室長

＜高橋支所＞ 前田支所長、出口副支所長、加藤副主幹、川瀬主査

≪内容≫

1 豊田市民の誓いの唱和

2 会長あいさつ

3 提言書授受・提言内容説明

松村会長から豊田市長へ提言書を手渡し、提言内容について説明した。

【提言内容の抜粋】

美里地区内の自治区及び各種団体の役員に対して実施した「美里地区のまちづくりに関するアンケート」を参考に検討した結果、当地区では高齢者福祉に関する課題解決を、優先して取り組む必要があるとの結論に至った。高齢者が本当に必要とする支援策を地域で実施するためには、高齢者が抱える当地区特有の課題を、私たち地域会議が正しく理解する必要がある。今後、地域会議委員が中心となって調査チームを立ち上げ、地域性を考慮した高齢者福祉に関する調査を実施していきたいと考えており、市には、高齢者福祉に関する実態調査の専門知識を有するアドバイザーを当地区へ派遣していただくなど、調査の実施を支援していただきたい。

4 市長あいさつ（要旨）

- ・ 提言ありがとうございます。熱心に議論していただいたと思う。提言内容については、一度やってみる価値がある。
- ・ 高齢化の話は、議論が必要以上に深刻にならないよう注意が必要。65歳を高齢者と定義したのは1956年。当時の日本の平均寿命は65歳ほどで、今では20歳近く伸びているが、いまだに70年前の基準が使われている。当時の65歳の肉体的な能力は、現在の74～75歳の能力にあたると言われていることから、日本老年学会では高齢者の定義を75歳に変えようという議論がなされた。ただし、この基準は、年金や社会保障の話とは切り離して考えるもの。
- ・ 10年ほど前にシニアアカデミーで「ピンピンコロリ」に賛成か聞いてみたところ、賛成は2割ほどだったが、先日同じ質問をしてみたら8～9割の人が賛成と

回答した。以前は「具合が悪くなったら病院で延命治療を受ける」というイメージだったが、コロナ禍を経て「入院したらそのまま話ができなくなってしまう」というイメージに変わったように感じる。今まで右肩上がりだった平均寿命は、コロナ禍で若干下がった。日本人の死生観が変わったのではないか。

- ・今回の提言は、「要支援・要介護認定等を受けていないものの、生活に困りごとのある高齢者」に焦点をあてているが、「ピンピンコロリ」を目指して、もっと元気な高齢者を対象にしてもよいのではないか。美里地区では、高齢者の定義を「80歳以上」にしてみても良いのでは。
- ・災害が起きると、お金があっても物が無い。高齢化が進めば進むほど、近くの人々で助け合う「近助」が重要になってくる。自助、共助、公助に加えて、「近助」を取り入れると、様々な課題が解決できるようになる。
- ・地域活動は「安近短」のレジャーだと感じている。例えば、地域会議はお金がかからず、近くで、短い時間で、満足感が得られる。そういう役割が、地域にもっとできて、どんな人でも「安近短」の役割の中で人から感謝される機会ができるとうい。誰もが孤独感、孤立感を感じない社会になるとよい。
- ・「何か困りごとはありませんか」と聞くと、様々な意見が出てくる。それがどれほど切実なのか、対応策ができたときに利用されるのかを見極める必要がある。地域バスを例に挙げると、地域のためにはあったほうが良いが、自分自身は乗らないという人が多い。僅かな利用者のために、多額の予算がかかることがある。出てきた意見の中には、「近助力」で解決できることもあるのではないか。美里地区は、同じ時期に転入されてきた方が多く、元々「近助力」の強い地域だと思っている。

5 意見交換

<吉本委員>

- ・職場のある名古屋市の様子と比べると、美里地区は人が集まる機会が多いと感じている。特に東山町自治区はイベントが多く、参加する住民も多い。第9期豊田市高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画（以下「計画」という。）で、様々な施策がされている一方で、市民には見えてこない。介護保険事業だけでは、住民を支えられないと感じており、美里地区で盛んになりつつある「お助け隊」の存在が今後重要になってくる。行政には、お助け隊の活動に対し、金銭面や制度の支援をお願いしたい。
- ・地域バスは、細かいルートを回ることができない。指導を受けて、自治区やお助け隊などが、ボランティアで行う輸送を取り入れられないか。美里地区がモデル地区としてやってみたい。

- ・市営住宅や県営住宅が過疎化している。うまく活用して、シルバーハウジング化し、地域の人がそこで働き、将来的に入居できるような仕組みができないか。

<市長>

- ・まず、今回の美里地域会議からの提言には大賛成。他の地域会議では、ピンポイントで取組を提言されることが多いが、一度冷静に立ち止まって、分析してみることは大切なこと。
- ・色々なアイデアをいただいたので、これについては一度引き取ります。

<岡本委員>

- ・計画の内容を確認したところ、当地域においてもすぐに取り組めることがあると感じた。昨年度、美里地域会議から市長へ、集いの場づくりについて提言した。介護予防としても、つどいの広場に集まることが重要であると計画を読んで再確認した。集いの場にコーディネーターが来てくれる制度を知ったので活用していきたい。美里地区には複数の集いの場があるが、人が集まらないことがある。美里地区はどうすれば集いの場をより活用できるようになるか意見を伺いたい。

<市長>

- ・地域にどのようなマンパワーがあるのか分からない。集いの場として、自治区の集会所がもう少し活用されると良い。集会所に掲示板を置いて、「こんなことが教えられる」という情報を出して人を集めているところもある。ホームランのような取組はなく、ポテンヒットを積み上げていくしかないのでは。

<岡本委員>

- ・自治区集会所で、オレオレ詐欺の防ぎ方などをとよた苑の人に講演してもらったことがある。地域の人に好評だった。

<市長>

- ・市の職員や警察官から出前講座を受けられる制度がある。支所へ相談してほしい。
- ・別件だが、「行きたくなる避難所」の計画がある。避難所には行きたくないと思っている人が多いが、落語や将棋など、地域の中の一芸に秀でた方が避難所にいると、被災した際に避難所に行きたくなるのではないか。地域の人材が、地域の中で生かせるとよい。
- ・今回の提言で行う調査では、困りごとに加えて、「災害時や地域のイベントの時にあなたはどのような役に立てますか」と、聞いてみてほしい。

<鈴木委員>

- ・提言書にあるように、美里地区は70代が多い。昭和40年代に転入し、豊田市の発展のために働いてきてくださった方が、その年代になってきている。
- ・自分なら何ができるか、何がやりたいかが大切なこと。自分自身、退職後の生活で人の役に立ちたい、人から頼られたいと感ずることがある。いつまでも自分が社会の一員であり、社会で頼られる存在であるという思いで、80歳、その先も

生きていけると、「ピンピンコロリ」の美里地区が実現できる。美里地区を、いつまでも生き生きと社会の役に立って生きられるモデル地区として選んでもらい、市の様々な取組を試してもらいたい。

＜市長＞

- ・仕組みを緻密にすればするほど離れていく。できるだけ単純化していくのが現実的。
- ・「ありがとう」といわれて嫌な気持ちになる人はいない。とことん「ありがとう」という。美里地区で「ありがとう」を恥ずかしがらずにいえる文化が根付くと、色々なことが解決できるのでは。モデル地区という話で言えば、難しいことの前に「ありがとう運動」をやってみてはどうか。美里地区と一口に言っても、様々な住まれ方がある。地域性による違いを乗り越えようとしたとき、「ありがとう」と言うことが一つのきっかけとなる。

6 市議あいさつ

会議を傍聴した岡田耕一議員、根本美春議員、水野博史議員があいさつした。

7 事務連絡

次回の地域会議の予定について

次回：令和7年4月10日（木曜日） 午後7時～

場所：美里交流館 多目的ホール